

古き北歐の?々とその敵役

著者	松谷 健二
雑誌名	東北ドイツ文学研究
巻	1
ページ	(1) - (9)
発行年	1957
URL	http://hdl.handle.net/10097/00133426

古き北歐の神々とその敵役

松 谷 健 二

周知のごとくドイツでは古い神々の姿はほとんど残っていない。早くから行きわたつたキリスト教のために、まとまつた神話が消えてしまつたのである。Merseburger Zaubersprüche など少数の例外はあるが、あまりにも断片的であり、その多くは僧侶によつて潤色され、かなりのゆがみが見られる。たとえば、Wessobrunner Gebet, Muspilli は骨子は明らかに異教の遺産だが一応はキリスト教のものとして語られ、しかも前者は世界の創造、後者はその滅亡というキリスト教神話にも共通な材料に限られて、古い神々のいとなみについては全く知ることはできない。Märchen などではよく古い神話をつたえているものだが、それでもなお靴をへだてて搔くのが強い。

他方、Tacitus, Caesar などの著書も貴重なものではあるが、やはり外国人の見聞記にすぎず、そのまゝうけ入れるのは危険である。たとえば“Germania” C. 9 では、ゲルマン人は自分たちに似せた神像を持たないとあるが、これは明らかに正しくない。

だから、もし古典世界が Thule とよんだ北の国々がゆたかな文献を残しておいてくれなかつたならば、我々は古いゲルマンの神々についてはほとんど知り得なかつたであろう。北の国々といつても、重要なのはノルウェーと九世紀以来のその姉妹国アイスランド、ことに後者である。

ヨーロッパのこの部分では西部・東部でのように民族の移動がはげしくなく、キリスト教の侵入もおそかつたし、改宗が施政者の手で強圧的になされたので、民衆の中まで行き渡らなかつた。丁度 1000 年にノルウェー王の武力で改宗したアイスランドに最初の修道院が出来たのがやつと 1133 年であるという事実も、教会の影響力の弱さを示すものであろう。布教僧たちも、ドイツにおけるがごときアイルランド、アングロサクソン出の“Glaubenshelden”¹⁾ではなく、時には武器をとつてけんか相手に打ちかかるような人間が多かつた。このような土地は古い神話の保存にはたしかに有利であつた。

この世界の Altwestnordisch でかゝれた文学は、吟遊宮廷詩人(skaldar)の作品があらゆる分野にわたる散文物語(saga)を持つが、神話的にもつとも重要なのは新旧両 Edda であろう。旧 Edda は 13 世紀の写本で残っているが、詩の形にまとめられたのは大体 10 世紀前後と思われる。新 Edda はいわゆるアイスランドのルネッサンスの大学者 Snorri Sturluson (1179—1241) の作で、旧 Edda その他の我々にはつたわつていない資料から一つの神話体系を作り出している。旧 Edda の神話関係の作品は十数篇だがもちろん作者もわからず中には不完全な形のものもあり全く体系を持たないので、大いに新 Edda を参照しなければならないのだが、Snorri はあくまでも学者であり神話を現実としてうけとつた人間ではないことに注意しなければならない。以下の小論は、主として両 Edda から見た神々

とその敵役のスケッチである。そのうちのあるものは北欧だけにとどまるが、ある者は他のゲルマン部族についてもあてはまるであろう。

1) A. Heusler : Germanentum S. 117

I. æsir 神族と vanir 神族

昔、この二神族の間にはげしい戦争がなされた末、両軍は和睦して後者は前者のうちに吸収された。旧 Edda の Völuspá (以下 Vsp. と略) に次の四節が見られる。大要は：

『21, 彼ら(æsir)が Gullveig (金の力の意、女の名)を槍でつらぬき、Óðinn(dt. Wodan)の館で焼いた時、世界最初の戦役が起つた。彼女は三度生まれ変り三度焼かれたが、それでもなお生きていた。

22, 彼女は行く先々で魔女と、予言にたけた巫女とよばれ、機会があれば魔法を行い、人人の心をたぶらかして、いつも悪性の女どもにもてはやされた。

23, æsir 神族は vanir 神族に租を払うべきか、又は両者が共に犠牲をうけてうやまわれべきかをはかつた。

24, Óðinn は敵のただ中に槍を投げた。æsir 神族の城壁はやぶれ、vanir 神族は戦場をふみ歩いた。(注、この節は 23 の前に入るべきものらしい。)]

Snorri はこのばくぜんとした事件に自分の Edda ではほとんどふれずに、ノルウェー王国史 Heimskringla の半神話的序文ともいふべき Ynglinga saga C.4で次のように語っている。その大要は：

『Óðinn のひきいる大軍は vanir の国に攻め入つたが敵も健気に防ぎ、戦況は一進一退で、æsir の国もあぶなかつた。遂に両軍は戦いにあきて和を結び、人質として æsir 側からは美しき Hœnir とかしこき Mimir が、vanir 側からは Njǫrǫr とその子 Freyr¹⁾ がさし出された。しかし Hœnir はことがあつても Mimir がそばにいないければ何も語らなかつたので、vanir は人質に低能な者を送つて来たと怒り、Mimir の首をはねて Óðinn の許に送りかえた。Óðinn はそれに香油をぬつてくざらないようにし、呪文をかけると首は口を開いていろいろなかくされたことを Óðinn に物語るようになった。Óðinn は Njǫrǫr と Freyr を æsir 族の祭司にした。Njǫrǫr の娘 Freyja もやはり祭司であつたが、æsir たちに故国で行われてた魔法をはじめて教えた。故国での Njǫrǫr の妻は彼の妹だつた。こういうことはそこでは許されていたが、æsir の国では禁じられている。』

以上でわかるように Snorri は少々あいまいな Euhemerismus によつてゐるが、この態度は正しい。今日ではこの Vanenkrieg が異なる神々をいただく二部族間の実際の戦争の反映であるということは定説になつており、たとえばデンマークの文化史家 Grönbech は、æsir は þórr (dt. Donar) を先頭とする遊牧民族の神々；vanir をいただくのは農商業民族で、中部スウェーデンとノルウェーの Drontheim(Thronthjem) 附近に定住していたものとしている²⁾。ここでその背景を少しくわしくたづねてみたい。

æsir(sg. æss)は全ゲルマン語に見られ、(got. ans, ae. ōs, as. ās, ahd. ans.), 語源は不明だがどこででも神の意であるのに反し、vanir (sg. vanr) の語源は as. wanom, wanum, (klar, glänzend) lat. venus. (Schönheit)³⁾ と考えられ、神の意に用いられているのは北欧

だけである。Grönbech は女神 Freyja が多く vana-goð, vana-dis, vana-brúðr と Pl. Gen. と共によばれているところから, vanir はかつての部族名で æsir をいただく人々が後にそれを神族名としたのだろうと考えているが³⁾, そうであつたとしてもその一段階前にはやはり神々がいたのではないだろうか。Die glänzenden という名は人間よりも神々にふさわしい。これがどういう人々であつたかは明らかでない。Stroh は非インドゲルマン系とし、戦争の時期を新石器時代(前 20 世紀頃)ににおいているが⁴⁾, vanir の一人である Njǫrðr は今日では Tacitus の Nerthus (“Germania” C. 40) の男性形であるとされ、早くから西部ヨーロッパにひろまっていたわけで、戦闘的であつたゲルマン人が他民族の神格にかくも高い地位を与えたとは考え難い。又時期にしても、もし Vsp. St. 21 の Gullveig を重視することが許されるならば、新石器時代というのは少し昔すぎるように思われる。

私は vanir を æsir (全般的神々)のうちのグループの別称と考える。(なぜ北欧でのみそういわれたのかはわからないが。)同じゲルマン系の部族の間でも、生活様式、生活環境によつて崇拜する神はちがつていたはずだから、この戦争は昔は無数にあつた小侵略戦のうちの比較的に大きなものだつたのだろう。北欧以外ではこの神話を暗示するようなものは全くない。vanir にはどのような神々が属していたかは決定的には云えないが、言葉の意味からして“大気、大洋”(すなわち農業と航海)に関係するものらしく、すでに述べた Njǫrðr, Freyr, Freyja の他に Baldr があげられよう。(Baldr は Edda では Óðinn の息子となつてはいるが、それをめぐる神話の性格から見れば vanr である。)これらの神々は明朗でやさしく、たしかに安定した生活をたのしんだ人々の神である。これに対し æsir の神々、Óðinn, Týr, Þórr などは、あるいは才智に、あるいは武勇にすぐれて、ともかく強引で戦闘的な存在である。しかし、これが純粹の宗教戦争でなかつたことは云う必要がないであらう。

どこで戦いが行われたかはわからない。前記 Grönbech は Drontheim 附近としているが、これは別の神話から類推している。しかし、現在でもこの町を北端とする北緯 61 度までの地域は、Ostnordisch に特有の Monophthong を残し、Westnordisch の領域内で一種の Sprachinsel を形成している⁵⁾。これはおそらく偶然の現象であろうが一応記しておく。

次に時代を考えてみよう。Grönbech は Þórr を æsir の代表者としているが、Edda ではそれははつきり Óðinn となつている。(もし Grönbech が Vsp. St. 26 にはやはり立つ Þórr が出て来るためにそう考えたのならそれはあやまりで、St. 26 はもう別な神話に移っているのだ。Snorri も彼の Edda, Gylfaginning (以下 Gfg. と略) C. 42 でそう解釈している。)ここで一つの新しい問題が生ずる。つまり Óðinn は北欧では最初から知られてはいなかったのだ。ルーネ文字で記された古い碑文では Þórr の名が圧倒的に多く、Óðinn の名はかなり時代が下つてからやつと見えて来るのである。Skandinavia 半島から出たゴート族には Óðinn=Wodan 崇拜の跡はないし、祭式などの様子から彼らの神々は北で vanir とよばれていたものではなかつたかという想像もできる⁶⁾。旧 Edda のうちには二度 Óðinn の別称として Gautr という名前が出て来る。これを南スウェーデンの Gaut 地方に関係させる人もあるが、たしかではない。よしそうだとすると、おそくなつてからつけられたものであ

ろう。Óðinn=Wodanの崇拜はドイツ南部あたりで発展してから北方に移入されたものらしいが、私は、この神格が北欧にあらわれたことが、Vanenkrieg に一役かつたのではないかと考える。それ以前に戦争がなされて、神話が伝承されて行く過程で Óðinn が中途から入つて来たという可能性はうすい。神話は立役者の名は容易に忘れないからである。しかし前にも述べたごとく、Óðinn が主神になつたからという宗教的な理由で戦争が起つたのではない。これはデンマークあたりからの侵入民族ではなかつたろうか。北から南への移動は、多くはなかつたが、考えられることである。又ゴート族の神々がたしかに vanir であつたならば、彼らが故国を捨てたのはこの戦争のためだと想像も許されよう。(Vsp. St. 31 の、ヴァルキューレたちがゴート族の上にまいおりるという記述もここで思い出される。)もしそうだとすれば彼らは Tacitus の時代には Weichsel 河の下流におり、三世紀に Donau の流域にあらわれたのだから その速度から概算すると、事件は多く見積つても前10世紀よりはさかのぼらないのではないだろうか。

ここで Edda の本文をふりかえつてみたい。Gullveig の正体はわからない。女神 Freyja だとも、又、富の破かい的な面のシンボルだともいわれるが、共に完全には納得しかねる。前者については Vsp. のすぐ後に同じ女神が好意的に述べられているからで、後者については、このような抽象的な表象は古いゲルマン人にはえんがないはずだからである。だが、Gullveig は新しく挿入されたものとは考えられない。Snorri がこれにふれていないのは、彼自身にもすでに意味がよくわからなかつたか、又はあまりにも神話的な色彩が強すぎ、Ynglinga saga にはふさわしくないと考えたためではなからうか。私はこれが金で作つた神像ではなかつたかと想像する。当時は、信仰の中心(神殿のある場所)が政治の中心であり、信仰の対象のうちに民族の繁栄の力があると思われていたのだから、純粋に宗教的な闘争(たとえばキリスト教の布教に際してのごとき)でなくとも、侵入した æsir 軍はまず神殿をおそつたのであろう。英国の東海岸に上陸した Wikingar が最初に修道院を焼いたという事実も、彼らには信仰と政治の区別がなかつたということを示している。æsir が Óðinn の館にこれを持ちかへつたが果せなかつたことは、勝敗がなかなか定まらなかつたことを暗示しているのではないだろうか。少くとも Edda では æsir の方が苦戦だつたように見える。この Gullveig に関しては Vsp. の作者はたしかに好感を持つてはいない。他の神話では vanir は全く æsir と同格に扱われているが、ただ一ヶ所旧 Edda, Vafþrúðnismál St. 38 に、世界の終末の後には Njǫrðr は自分の故国にかえるだろうと、明らかに両神族の対立を暗示した記述がある。ここから、両部族を対等とする態度の外に、æsir 側に一種の Chauvinismus が存在していたことが考えられる。本来はなかつたはずの善と悪との対立がわずかにのぞき出しているようだ。Mímir に関する神話は Edda では戦争と関係がない。Snorri かその先輩がここにむすびつけたものと思われる。

1) 参照した英訳では Kwasir となつている。おそらく写本がちがうのであろう。

2) W. Grönbech: Kultur u. Religion der Germanen. 1954. II. S. 337 ff.

3) S. Sijmons u. H. Gering: Die Lieder der Edda. 1927. III. 1. S. 32f.

4) Fr. Stroh: Handbuch der germ. Philologie. 1952. S. 651.

5) 同上 S. 205.

II. 神々と巨人族

Edda のほとんどすべての神話に共通の Motiv は神々と巨人族の交渉である。その多くは戦いだ、そのチャンピオンは Þórr だ。旧 Edda の *Þrymskviða*, 新 Edda, *Skáldskaparmál* C. 17, C. 18 などその代表的なものである。この種の戦いは Vanenkrieg とはちがつてひんぱんに、それも決闘の形で行われる。又、Volkssage 的な色が強い。これはこの神話の Kette を形造つた文化のにない手が、巨人族と本質的な関係を持たなかつたためであろう。場合によつては Schwank に迄なっているから、巨人族が好意的な目で見られなかつたことはたしかだ。Edda は古いとはいつても、この Riesen-Vorstellung の変化に無関係であり得るほどには古くない。これは他の事象についてもいえることで、我々はいつもその背後に目を向けなければならないのだ。

ずつと後世にまで残っているこの巨人族は全ヨーロッパ的なもので、以前から多くの学者によつて荒々しい自然（暴威をふるう嵐とか不毛の岩山など、人類に歯をむくもの）のシンボルと解せられて来た。他の場所では非常に慎重な Helm もそう考えている¹⁾。Grönbech はさらに進み、すべての巨人に対する神話は Kultdrama であるとし、犠牲を殺すことは悪の力である巨人を征服することのシンボルであると述べている²⁾。私も又最近まではそのように考えていた。

これによると、神々が人間の味方をして巨人をやつつけるというのだが、Edda だけに限つてみてもこれだけでは解決できない問題が無数にある。たとえば：

1. 神々と巨人族はしばしば深い血族関係を持つ。Njörðr の妻 (Gfg. C. 23 u. a.), Freyr の妻 (旧 Edda, *Skírnismál* u. a.), が巨人であるのみならず、主神 Óðinn も何人かの巨人の娘を愛人としている。のみならず、神々の多くは直接に巨人から生まれている。Óðinn (Gfg. C. 6), Týr (旧 Edda, *Hymiskviða* St. 5) も例外ではない。両者の区別ははなはだあいまいなのである。

2. Óðinn の伯父らしい Mimir (旧 Edda *Hávamál* St. 140) は普通水に関係のある巨人となつてゐるが、前出の *Ynglinga saga* C. 4 から明らかなように、良き有用な智をあらわすもので、彼（又は他の巨人）の保管する貴重な蜜酒は、精神文化の芽とも見られるものである。Óðinn は身の危険をおかし、計略を以つてこれを盗み出している。(Hávamál St. 103 ff.) 物質的にも巨人たちは神々におとらず富んでいる。

3. Þórr はたしかに雷神としての一面を持ち、彼の武器 (Mjöllnir というふしぎなハンマー) は落雷と考えられるが、この面を強く打ち出して行くと、ここでも又巨人との区別がつかなくなつてしまう。雷が嵐その他と戦うという想像は妙である。同様に Mimir も神々に同化して行く。Heimskringla ではすでにそうなつてゐる。

4. 全体的にみても敵であつても、巨人族は遂には神々に亡ぼされるべき運命のものではない。(他民族の神話のように。) それどころか、世界の終局の際に、真向から神々と戦つてともに倒れて行くのである。

5. 運命の女神 *nornir* は神々よりも強い力を持つものだが、これも巨人族の出となつてゐる。(Vsp. St. 8, u. a.)

故に、我々は別の考え方をしなければならない。次に名前をしらべてみよう。

a. ゲルマン系諸語に共通な *and. purs, ags. pyris, ahd. tursa*. 語源は不明。“のどをかわかした者”, “さわぐ者”などが考えられるが定説ではない。非ゲルマン系の言語から古く借用して来たのではないかとする人もある³⁾。

b. *Hochdeutsch* にはない *and. jǫtunn, ags. eoton*. これも語源は不明。“がつつ食う者”の意であるかもしれない。

c. 北方にはない *ahd. risi, as. wrisi*. これは *skr. vrśan* “stark” から来たものらしい。

結局、名前は大した手がかりにはならないのであるが、語源の不明確さは言葉の古さを示し、地域によつて使われる言葉がちがつていたという事実も、表象に地域差のあつたことを示している。フィンランド語に入つて行つた *tursas* も“海の怪物”の意となつてゐる。

最近の神話学は *Euhemerismus* を重視しているが、英国の *Skyles* はこれによつて、巨人とは原住民だと考えた⁴⁾。私もこれに従いたい。*Edda* の巨人神話にはいろいろな枝が生え出ているが、幹はやはり一つで、それは(おそらく非インドゲルマン系の)ヨーロッパの原住民なのではないだろうか。もちろん、彼らの神々もそこに含まれているわけである。巨人族は神々の誕生の前にすでに存在していたという神話もここに関係するように思える。*æsir* 及び *vanir* の神々をいただく侵入民族と彼らとの間は、*Vanenkrieg* など比較にもならないほどにはげしく、かつ長くつづいたのにちがいない。*Grönbech* に従つてこれらの神話が *Kultdrama* だとするならば、これは強敵に対する勝利を祈るためであつたはずだ。時期は、巨人たちの武器がたとえば *Hrungnir* のようにとがらせた投擲用の砥石であつたり、石と木で作つた楯を持つていたり(*Skáldskaparmál* C. 17)することから、新石器時代の後期におかれよう。彼らは劔や槍は使わず、*pórr* の強力なハンマーをしきりにほしがつてゐる。

彼らは相当に手強かつた。又、かなりの文化を持つていた。*Edda* の巨人たちは畸型だつたり、山の洞穴に住んでいたりはいしない。それどころか娘たちは美しく、神々の恋心をそそる。だから侵入民族は、ある場合には彼らと姻婚関係を結ぶ方が有利だと考えた。*Njǫrðr*, *Freyr* の結婚の話はこれを反映するものであろう。その際、巨人の女が神々の許に来るばかりで、女神にして巨人を夫とした者がいないという神話的事実は、この見解をうらずけるものである。これに類した歴史的事実も諸所でみられる。又、巨人の娘を正妻に迎えたのは *vanir* 神だけであり、巨人族に対して闘争より考えないのは *pórr* だけ、*Óðinn* はその中間に位するという関係は興味深い。前章と関連して、同じインドゲルマン系の民族のなかでも、*pórr* を奉ずる遊牧民族は原住民に対して強硬な態度をとり、*Njǫrðr*, *Freyr* らを神とする定着民族は友好的に出ていた、そこに *Óðinn* があらわれて *Vanenkrieg* となり、その後は対原住民政策が中庸となつたとは考えられないだろうか。

だが結局巨人たちが次第々々に北の山地に追いやられてしまつたことは明らかである。後に巨人神話、伝説の本来の姿が見失われてしまつた時期になつて、人々は北の山から吹いて来る冷い嵐、その敵意を持つような姿などを巨人とむすびつけたのであろう。*Edda* には無

数の巨人の名前があるが、自然現象のシンボルならば、このように多いはずがない。これらは元来原住民の神か頭目の名を、侵入者が適当にかえたものであろう。同じ巨人にも破かい的な者とそうではない者があることも、ここからうなずける。

1) K. Helm : 前掲書 II, 2. S. 91ff.

2) W. Grönbech : 前掲書 II. S. 282.

3) 同上 S. 90.

4) E. Skyes : Everyman's Dictionary of Non-classical Mythology. 1952, p. 84.

III. Loki

北欧神話における Loki 神の行動は奇観というより他ない。彼は神々の世界でのメフィストフェレス、神々とそれに敵対する巨人族の双方につき双方をうらぎる存在なのである。彼は、巨人に盗まれた Þórr のハンマーをとりもどす手つだいをするかと思えば (Þrymskviða) 神々を相手に悪口のかぎりをつくし (Lokasenna)、女に化けて神々に不幸をもたらし怪物をうみ (Hyndluljóð St. 42f. u. a.)、一方では女神 Freyja を巨人の手から守るために牝馬となつて Óðinn の八本足の名馬 Sleipnir をうむ。(Gfg. C. 42)。そして最後に光明神 Baldr を死にみちびく (Vsp. St. 34, Gfg. C. 49f.) という許され得ない悪事のために神々から岩にしばりつけられ、そこで身をふるわせる度に地震を起すが、世界終末にのぞんではいましめを解き冥府の軍勢をひきいて神々に向い、Heimdallr 神と相討ちになつて果てる。(Gfg. C. 51 u. a.) その他にも、Þórr や女神 Iðun をおびき出して巨人の手に渡そうとしたり、Þórr の妻 Sif の髪を切つて丸坊主にしたり、Edda は彼の奇行にみちている。それでも彼は æsir の一人なのだ。どういう訳であろうか。彼は一般には火の神であると考えられて来た。(Loki < logi “Flamme”) 火が人間に及ぼす功罪がその神話にあらわれているというのだ。つまり自然神と文化神の二面を持つているわけで、神話解釈には非常に便利だが、これだけで Loki のすべてを説明することはできない。それに Edda は Surtr という火の巨人を知っている。又、この神の一つの特性であるらしき地震を重要視して、ヘーラクレスの原形と見られるコーカサスの地震の巨人に関係づけ (A. Olrik)、ノルウェーには火山がないからアイスランド時代に生じたものだろうとしている¹⁾。だがこれも Loki のすべてではなく、発生した時代もそれほど新しいはずはない。

Loki の姿を複雑にしているもう一つの理由は、彼が Lóðurr という名前で Óðinn, Hoenir と共に最初の人間を作つたことである。このように重要な事件への Loki の参加が彼の性格をますますわからないものにしていったのだが、この Lóðurr はおそらく Loki ではあるまい²⁾。Edda の他の場所で Óðinn, Hoenir, Loki のトリオが登場するところから同一視されて来たのだが、この条件は十分とはいえない。Lóðurr はここで見られるのみだが、別の神格であろう。(Freyr と解する人もある。) Snorri はここで Óðinn, Vili, Vé の組合せにしている (Gfg. C. 6)。彼が Vsp. を知らなかつたはずはないし、他の場所では Vsp. のトリオを用いているのだから、これはわざわざかえたのか、それとも別の伝承によつたものと思われる。ともかく Loki は間ちがつても人間の創造に加われるような存在ではない。しかしそれにしても彼の性格は混沌としている。なぜこのような神ができ、又かくも重要な神話上

の地位を与えられているのだろうか。彼は真の悪神ではない。神々を助けようとする意志がある時はある。これは何か具体的なもののシンボルではない。何か抽象的な、それでいて現実的な、又人間には究めがたいものが次第に変化して行つて Edda に見られるような多彩なものになつたにちがいない。神々の仲間に加えられていることは彼の重要性を暗示し、最後の行動は彼が本質的には神々の敵であつたことを意味する。私は彼の謎をとく鍵は Gfg. C. 34 u. a.にあると思う。それによれば Loki は巨人の女に三つの怪物をうませている。その一つ Hel は云うまでもなく冥府の人格化で、二番目の Miögarðsormr という大蛇は大地をとりまく荒海のシンボルとせられるが明らかに冥府の怪蛇 Niðhoggr (Vsp. St. 39 u. a.) と関係を持つ。三番目の怪狼 Fenrir はこれも冥府の怪犬 Garmr (Vsp. St. 44 u. a.) を思わせる。(世界終末の折には、怪狼は Óðinn を呑みこんでその子に討たれ、大蛇は Þórr と相打ちになる。) Loki と以上の怪物の親子関係は新しいものかもしれないが、Loki の方に彼らとの関係を許す要素があつたことは否定できない。ここでもう一度 Loki の名前にもどつてみよう。語源としては前出の logi の他に, lúka が考えられ、これから見ると Loki は “Schiesser”, “Beendiger” の意味になる。普通はここでも “もやしつくす火” が連想されているのだが、私はこの Beendiger を文字通りの意味にとりたい。彼は死神なのではないだろうか。それも冥府の主人としての死神ではなく、死、破かいを直接につかさどる神である。冥府の女主人は Hel だが、彼女は死者をしつかりとつかまえておくだけで、死を作り出すことはできない。それに、死者すべての国である hel が昔からあつたかどうかはうたがわしい。

つまり Baldr を殺した Loki は、悪神としてではなく、Baldr の死神としてであつたのだ。巨人の味方になる時は神々の死神であり、神々に味方する時はその逆だつたわけである。それが世界終末の時になると冥府の軍勢（これも死者ではなく獄卒ともいふべき存在であろう。）の先頭に立つて正体をあらわしたのだ。そこで Loki が Heimdallr 神と相打ちになつているのは、Loki の本然の姿をすでに知らなかつた Vsp. の詩人の同情心に発したものであろう。本来の Loki はここでは破かいの大立者 Surtr のうちにとけこんでいると解せられる。

Loki は北欧以外には残っていない³⁾。類型を英雄伝説に求めようとする努力も無駄である。むしろ Volkssage 中の、いたずら好きで、人間に対してある時は好意を又ある時は悪意をいだく Zwerge が性格的には Loki を思わせる。序章でも述べた通り、北欧のほかには神々の名すら十分に残っていないのだから断言はできないが、この神はおそらく北欧で発達したのであろう。それはやはりキリスト教から、もつともにくまれるような存在だから、南の地域では真先に布教僧の刃にかゝつたものかもしれない。

古くは、あるいはおそれられ、あるいはにくまれたにちがいない彼が、パロディ化されるようになったのは、死に対する宗教的な考え方の変化の結果である。古いゲルマン人が地獄（生前の罪に対する罰をうける場所としての冥府）を知らなかつたことは、Ulfilas の聖書のゴート語訳から明らかである。彼は *ādans* (hadēs) は *helja* と訳してゐるが、*Geēnna* (Geenna) はそれをそのまま *gaíalnna* とうつしとつてゐる。だが Edda ではその二つが共にあらわれて来ている。このような変化にともなつて、手あたり次第にほろぼして行く死神の姿は徐々

にくずれたのであろう。この変化に拍車をかけたもう一つの原因は Óðinn の出現だと私は考える。戦死者のための一種のパラダイスであるヴァルハル表象が Óðinn とともに発達したことはたしかで、双手をあげてこの来世観を歓迎した戦士たちの目に Loki の姿がみじめなものに映つたということは十分考えられる。Óðinn が、すでにみにくいものとなつていた Loki の三人の子供を、冥府におとし、大海に追いやり、又動けないようにしばりつけたという神話もこれを暗示する。

彼が女となつて子供をうんだという話は単なる侮辱であろう。これが男に対しての最高級の侮辱であつたことは種々の saga が示している。

結局、Loki の異様な姿は、上記のような変化の過程に巨人や侏儒などの他の要素が入りこんだ結果だと思われる。

1) Sijmons-Gering 前掲書 S. 49.

2) E. Sykes. 前掲書 S. 128.

3) K. Helm, 前掲書 II, 2. S. 276f.

なお Text としては

Eddalieder, hrsg. v. F. Jónsson. 1888. (Altnordische Textbibliothek 2.)

Die Edda, hrsg. v. R. C. Boer. 1922.

Die jüngere Edda, übersetzt v. G. Neckel u. F. Niedner. 1925 (Sammlung Thule 20.)

Heimskringla, translated by S. Laing. 1951 (Everyman's Library 847.)

を用いた。